

## 国際協力特別賞

Voice against violence みんなでつくる差別と暴力のない世界

独立行政法人国立高等専門学校機構明石工業高等専門学校 機械工学科 1年  
神馬 綾乃

1億2千万人。これは20歳未満で強制的な性交あるいはその他の性的暴力を経験したことがある女の子の数です。つまり世界中の女性の約10人に1人が若い頃に性的暴力を受けているのです。このような『暴力』に関する問題は、先進国や発展途上国などのくくりに関係なく、世界中で起こっています。

様々な暴力がある中で私が注目したのは『女性が受ける暴力』です。女性への暴力で大きな問題となっているのは、例を挙げたように性的暴力です。この暴力は、暴力を受けたそのとき、その一瞬だけ痛い思いをするわけではなく、生涯その傷を負うことになってしまいます。それは少女の明るい未来を、幸せを奪う行為だと言えます。しかし、性的暴力だけがそうとは言えません。例えば「ステレオタイプ」による社会的暴力・社会的差別も考えられます。今、世界中で「女の子だから」という言葉に縛られて、やりたいことができなかつたり、就ける職業が絞られてしまっている少女がたくさんいます。国や地域によっては伝統や慣習として厳しい男女差別が残っていたりします。それらが少女の夢を壊す原因になってしまっていると思います。

私は今、工業高等専門学校で機械工学の勉強をしています。将来はロボットエンジニアになりたいと思っています。日本で立派なエンジニアになれば、発展途上国に行ってそこに住んでいる人たちのニーズにあったものを開発したいです。でもエンジニアは男性の職業だという認識が一般的に強いと思います。この認識は日本だけでなく世界でもそう考えられていると思います。確かに、体力的な面などでできないことがあるかもしれませんが。それでも私は自分の夢である、ロボットを通して人の役に立つ、人を助けるということを諦めたくはありません。

このような私の思いと同じ思いの女の子は世界中にたくさんいると思います。エンジニアという職業だけでなく、ステレオタイプで男性の職業だと思われる仕事に就きたいと思ったとき、世間の目や社会の認識などの様々な壁が立ちはだかっています。その壁を一つずつ越えていくためには、『声をあげる』ことが大事だと思います。一人が声をあげて周りがそのあとに続けば、その声はとても影響力を持つものになるでしょう。別に解決策を政府に提出するわけではなく、道具を使うわけでもない。ただ声をあげるだけ。自分の声で社会を、国を、世界を変えていく。それだけで世界を幸せにできるのなら、やってみるしかないと思いませんか。

人によってしあわせの定義は違うと思います。つまり世界の幸せとは一概にこれだということではできないということです。けれど、自分が好きなこと、やりたいことをやってはいけないといわれることほど苦痛なものはありません。私は今、好きなこと・やりたいことをこのように堂々と発言することができます。でも世界中のどこかではそれさえできない、社会的暴力・社会的差別を受けている少女だっているはず。その子たちに幸せに

なってもらうためには、自分がまず幸せになって、どうやって幸せになれたかその過程を教えてあげられるような大人になりたいです。

「女の子だから」「女性だから」

これらの言葉は本当に都合の良いものだと私は思います。やりたくないことがあれば男子あるいは男性に押し付けることだってできる魔法の言葉です。しかしその一方で、これらの言葉によって苦しめられる女の子、女性は数多くいます。このことを声に出して世間に訴えかけること、Voice against violence が、世界の幸せのために私たちができる一番身近なことなのではないでしょうか。